

ジャン・カスーを読む

担当：伊藤 琢麻

ジャン・カスー (Jean Cassou) 年譜

年号	内容
1897年	7月9日、スペインのビルバオに生まれる。父レオポルドはベアルン出身（フランス南西部、スペインとの国境に近いピレネー山中の一地方）のフランス人、母ミラグロス・イバニェス・パチェーコはアンダルシア出身のスペイン人だった。
1901年	ロクール（フランス北東部グランテストにあるヴォージュ県のコミューンのひとつ）にカスー家は移る。そこで父の意向により、カスーは文学を中心に熱心な教育を受ける。 なかでもジュール・ヴェルヌ、ヴィクトル・ユゴーに惹かれる。 また母からは スペイン文化の魅力を教わり、ロマンチェロ（14～19世紀頃まで続く口頭の伝統に基づく詩作品）を暗唱することを好んだ。 同年、妹ルイーザが生まれる ¹ が、仕事の都合でカスー家はパリに転居する。
1913年	病に冒され、父レオポルドが亡くなる。
1914年～	生きるために、カスーは仕事を探すことになる。事務員 (secrétariat) として『メルキュール・ド・フランス』で働き始める。
1917年	バカロレアを取得、ソルボンヌ大学でスペイン語の学士課程に登録する。
1918年	ジョルジュ・ピュモン、アンドレ・ヴェルムセルとともに雑誌『スカラベ』 <i>Le Scarabée</i> を創刊。後に、『パリ文学』 <i>Les Lettres parisiennes</i> となる。この雑誌には、ジョルジュ・デュアメル、アンドレ・スピール、ジュール・ロマン、シャルル・ヴィドラックらが寄稿している。
1919年	ジョルジュ・ピュモンとともに、『鎖に繋がれた太陽、あるいはきのこの婦人』 <i>Le soleil enchaîné ou la dame au champignon</i> を発表。
1920年	<i>La vie des lettres</i> 誌に「キュビズムと詩」を発表。エスプリヌーヴォーに傾倒する。
1921年	『メルキュール・ド・フランス』誌の「スペイン文学」コラムを担当し始める。
1923年	『ヌーヴェル・リテレール』誌への寄稿が始まる。スペインでミゲル・プリモ・デ・リベラ独裁政権が成立。
1924年	プリモ・デ・リベラ政権を批判したミゲル・デ・ウナムーノが政治犯としてフェルテVENTOURA 島（カナリア諸島）に追放。カスーはショックを受け、この頃から 歴史、行動、政治と文学の関係性について考え出す。
1925年	処女小説『狂気礼賛』 <i>L'Éloge de la folie</i> を出版。この頃、ウラジミール・ジャンケレヴィッチの姉イダに出会い、彼女の影響で音楽の世界に導かれる。ダリウス・ミヨーと友人になり、「六人組」と交流する。
1926年	小説『黄昏のウィーン』 <i>Les Harmonies viennoises</i> を出版。この頃、ライナー・マリア・リルケやピエール・ジャン・ジュブと知り合う。

¹ 以下のサイトによると Louise は « sa sœur aînée » と書かれている。
<https://maitron.fr/spip.php?article18913>

- 1927年 画家レオポルド・シュルヴァージュやシャガールと知り合う。バロック芸術に関する論考を *L'Amour de l'art* 誌に寄稿。
- 1929年 『スペイン現代文学概論』 *Panorama de la littérature espagnole contemporaine* を出版。
- 1931年 マドリッドにて、詩人ペドロ・サリーナス（「27年世代」の詩人のひとり）とともに、スペイン第二共和制の成立に立ち会う。掌編集『サラ』 *Sarah* 出版。
- 1933年 ヒトラー政権成立。小説『倉庫にいる見知らぬ人たち』 *Les Inconnus dans la cave* 出版。
- 1935年 小説『パリの虐殺』 *Les Massacres de Paris*、批評集『詩のために』 *Pour la poésie* を出版。蜂起という観点から歴史意識がどのような発展を遂げたのか、人間を解放する自由な行為としての詩という考えを提唱する。
- 1936年 『ユーロップ』誌の編集長となる。スペインにて、アンドレ・マルローとともに人民戦線 (Frente Populaire) の成立を祝う。フランコのクーデターの際も同地を訪れる。内戦介入を支持し、ミュンヘン協定 (対独宥和政策) に反対するカスーは共産主義に傾倒するようになるが、1939年8月23日の独ソ不可侵条約の締結を機に共産党と完全に縁を切り、ロマン・ロランの了解を得て『ユーロップ』誌の編集長を辞任。批評『セルバンテス』を発表。
- 1937年 ピカソに関する論考を発表。
- 1938年 リュクサンブル近代美術館 (国立近代美術館の前身) の学芸員補佐に任命。
- 1940年 地下出版ジャーナル『レジスタンス』の編集を務める。ジャン・ポーラン、ジャン・ブランザ Jean Blanzat らが参加。
- 1941年 4月、Zone libre へ移り、トゥールーズでジョルジュ・フリードマンや書店経営者シルヴィオ・トランタン Silvio Trentin と出会う。1940年の冬から着手していた詩作品『薔薇と葡萄酒』 *La Rose et le Vin* を完成させる。12月12日、レジスタンスメンバーが逮捕され、カスーはフルゴール Furgole の刑務所に送られる。二ヶ月間の囚われの生活で、『密室のなかでつくられた三十三のソネ』が書かれる (1944年にジャン・ノワールの偽名で深夜叢書から発表、序文は「怒りのフランソワ」の偽名でアラゴンが執筆)。
- 1942年 刑務所を出て、軍事裁判に出頭する。国家の安全に危害を加えたという理由で、カスーは禁錮一年の判決を受ける。
- 1943年 自由になり、地下生活を続ける。
- 1944年 トゥールーズ地方の共和国委員に任命。9月16日、ド・ゴールにより解放勲章 la croix de la Libération が授与される。
- 1945年 『レットル・フランセーズ』にアントニオ・マチャードに捧げる論考を発表。
- 1947年 『選択の時』 *L'Heure du choix* をクロード・アヴリーヌ、ジョルジュ・フリードマン、アンドレ・シャンソン、ルイ・マルタン＝ショフィエ、ヴェルコールとの共著として発表。
- 1949-50年 戦後、ユーゴスラヴィア連邦共和国の大統領となっていたチトーがスターリンと決別し、ユーゴはコミンフォルムから追放される。カスーはチトーを擁護する。また、ハンガリー共産党のライク・

ラースローが死刑判決を受け、処刑されたのを機にスターリニズムときっぱりと決別、アラゴンの求めに応じて再び務めていた『ユーロプ』誌編集長を辞任。

- 1951年 クロード・アヴリーヌ、ルイ・マルタン＝シヨフィエ、ヴェルコールとの共著『自由な道』 *La voie libre* に「人間の意識」*« La conscience humaine »* を寄稿。この頃、ヨーロッパやアメリカ大陸を旅行する。
- 1953年 レジスタンスに関するテキスト『短い記憶』 *La Mémoire courte* を出版。
- 1954年 『三人の詩人：リルケ、ミロシュ、マチャード』 *Trois poètes : Rilke, Milosz, Machado* を出版。
- 1960年 アルジェリアでのフランス軍の拷問について、ド・ゴールへの手紙で糾弾。
- 1962年 プエノスアイレスのペンクラブ立ち上げの講演。
- 1964年 ベルギー王立アカデミーの文学セクションに選出。
- 1965年 ド・ゴールへの投票反対を呼びかけ。
- 1968年 68年5月の un recueil d'affiches に序文を寄稿。
- 1977年 最後の小説『もし僕がボスなら』 *Si j'étais un caïd* を発表。
- 1981年 回想録『自由のための生』 *Une vie pour la liberté* を発表。
- 1986年 パリに没す。

ソネ « sonnet » について 語源について

「音」« son » を意味する十二世紀頃の高フランス語 « sonnet » に由来する言葉。したがって、もともと「旋律」を表し、ついで「詩篇」を、プロヴァンス語では「歌」を表すようになる。詩の形式としての « sonnet » はイタリア語の « sonnetto » からも影響があり、これが十六世紀にフランス語で「ソネット」« sonnet » を表すようになったと言われている。

形式について

ソネは十四行、四つのストロフからなる。普通は、四行詩 (×2) + 三行詩 (×2) の構成。

四行詩の方は抱擁韻 « rimes embrassées » で脚韻は a, b, b, a / a, b, b, a となり、三行詩の方の脚韻は c, c, d / e, e, d となるのがもともと « canonique » なソネの作り方。 Cf. Ronsard, « Sur la mort de Marie » (1578).

十六世紀に入るとソネはフランスで花開き、特にプレイヤードの詩人に好まれた形式となった。ジョアシャン・デュ・ベレー『オーヴ』 (1549年)、ポンチユス・ド・チャール『恋の誤り』 (1549年)、ピエール・ド・ロンサール『恋愛詩集』 (1545-1552年) 等が作品例として挙げられる。

また、この時代のソネの流行はあらたな三行詩の脚韻規則を生むことになる。たとえばデュ・ベレーの « Les Antiquités de Rome » (1558) の三行詩は c, c, d / e, d, e となり、これをフランス流ソネの特徴とみる向きもある。音節数は、(1) 十音節、(2) 十二音節で作られることがほとんどだった。ただし、Jean de Schelandre の八音節やロンサールの七音節といったように例外もある。なお、ソネには音楽がつけられることも多く、宮廷で演奏されることもあった。

十七世紀に入ってもフランソワ・マレルブやテオフィル・ド・ヴィオーなど、ソネを使う詩人は少なくなかった。ただし、モリエール『人間嫌い』のアルセストのように²、その形式としての軽薄さを非難するということもあったようだ。

詩の不毛の時代だとよく言われる十八世紀を抜けると、十九世紀には、サント＝ブーヴをはじめ、ミュッセ、ヴィニエ、ゴーシェ、ボードレール、ルコント・ド・リール、シュリ・プリュドムらによるソネの再発見があった。この頃にはソネの規則は比較的緩やかになっているように思われる。たとえばソネの傑作のひとつに数えられているネルヴァルの「El Desdichado³」の形式は、a, b, a, b/a, b, a, b/c, d, d/c, e, e であり抱擁韻も放棄されている。他方、『悪の華』には収められたボードレールの四十三篇のソネのひとつ「Épigramme pour un livre condamné⁴」は a, b, b, a/a, b, b, a/c, d, c/d, e, e であるが、抱擁韻は保持されている。

二十世紀の詩人たちはというと、自由詩に取り憑かれており、はじめソネに見向きもしなかった。とりわけシュルレアリストたちは古びた詩学への攻撃を繰り返し、ソネは完全に消滅しきったかのように思われていた。だが、カスーのようにソネの力に頼る者もいたのは事実である。戦後になると、ウリポのメンバーであるジャック・バンス (Jacques Bens, 1931-2001) の「Sonnet irrationnel」(三行+一行+四行+一行+五行というようにストロフを分け、その合計を十四とするもの) のように、ソネの規則・形式を逆手に取った詩作を行うものもあらわれた。

ソネが提起する問題について

1) 記憶の問題

以上のように、形式的な厳格さに基づきソネは成立する。この厳格な形式によって、ソネは人々の記憶に刻み込まれやすくなる。ジャン・カスーがこの形式を採用した理由のひとつもそこにあったのだろう。事実、『密室のなかでつくられた三十三のソネ』は紙もインクもない牢獄で作られたため、ソネという形式のおかげで、カスーは心に留められたのだと思われる。

2) 自由との関わり・受け入れやすさの問題

ソネに関してもっと現代の詩人に目を向けると、ピエール・ヴァンクレール (Pierre Vinclair, 1982-) の名が挙げられるだろう。彼の *Sans adresse* (2019) や *Le confinement du monde* (2020) はソネで構成された詩集であるが、ヴァンクレールは枠にはめられた形式の中に見い出すことが可能な自由を探求していると言える。また、学校教育を受けたものなら一度は経験したことのあるソネは、さまざまなタイプの人にとって親しみやすい詩の形式なのではないかとも彼は考えている。

3) 展開の問題

さらに、ヴァンクレールは次のように書いている。「ソネとはリズムのある劇なのです。アレクサンドラン (あるいは一般的な定型詩) がソネの道具であるわけは、数 (もちろん、シラブルの数) よりも、行ったり来たり、あるいは上ったり下ったりする勢い、歌が問題になるからです。つまり、ドラマツルギーというわけです⁵」。

² オロントのソネを非難する *Alceste* のセリフは次の通り。「Franchement, il est bon à mettre au cabinet. / Vous vous êtes réglé sur de méchants modèles, / Et vos expressions ne sont point naturelles」。

³ <https://www.poetica.fr/poeme-27/gerard-de-nerval-el-desdichado/>

⁴ https://www.bonjourpoesie.fr/lesgrandsclassiques/poemes/charles_baudelaire/epigramme_pour_un_livre_condamne

⁵ Pierre Vinclair, *Sans Adresse*, Éditions Lullure, 2019, p. 119.

4) 脚韻との問題

カスーのソネは、ある意味では、二十世紀に入ってその中頃まで中傷されてきた脚韻の重要性を説いたアラゴンと通ずるものがあるように思われる⁶。二十世紀における自由詩や散文詩（あるいは詩的散文）の栄華と、詩の形式のあいだに横たわる問題については未だ一考の余地があると言えよう。

主要参考文献

Jean Cassou, Seghers, Collection : « Poètes d'aujourd'hui », 1967.

Cassou, JEAN, *Trente-trois sonnets composés au secret ; La Rose et le vin ; La Folie d'Amadis*, Gallimard, Collection : « Poésie / Gallimard », 1995/2016.

Cassou, JEAN, *Trente-trois sonnets composés au secret*, dossier réalisé par Henri Scepi, Gallimard, Collection : « Folio plus classiques », 1995/2016.

Charpentreau, JACQUES, *Dictionnaire de la poésie*, Fayard, 2006.

⁶ cf. Louis Aragon, « La rime en 1940 », *Œuvres poétiques complètes*, tome I, Paris, Gallimard, p. 727-733. ; Louis Aragon, *Les Yeux d'Elsa*, *Œuvres poétiques complètes*, tome I, Paris, Gallimard, p. 748.

『密室のなかでつくられた三十三のソネ』を読む

I

La barque funéraire est, parmi les étoiles,
longue comme le songe et glisse sans voileure,
et le regard du voyageur horizontal
s'étale, nénéphar, au fil de l'aventure.

Cette nuit, vais-je enfin tenter le jeu royal,
renverser dans mes bras le fleuve qui murmure,
et me dresser, dans ce contour d'un linceul pâle
comme une tour qui croule aux bords des sépultures ?

L'opacité, déjà, où je passe frissonne,
et comme si son nom était encor Personne,
tout mon cadavre en moi tressaille sous ses liens.

Je sens me parcourir et me ressusciter,
de mon front magnétique à la proue de mes pieds,
un cri silencieux, comme une âme de chien.

II

Mort à toute fortune, à l'espoir, à l'espace,
mais non point mort au temps qui poursuit sa moisson,
il me faut me retirer et lui céder la place,
mais dans ce dénuement grandit ma passion.

Je l'emporte avec moi dans un pays sans nom
où nuit et nuit sur nuit me pressent et m'effacent.
L'ombre y dévore l'ombre, et j'y dresse le front
à mesure qu'un mur de songe boit ma trace.

Ce n'est vie ni non plus néant. De ma veillée

I

葬送の入り江は、星星のあいだに、
夢想のように長く伸び 帆をもたずに滑る、
旅人の視線は水平に
広がる、睡蓮だ、冒険が進むにつれて。

その夜、僕はやっと高貴な賭けに出るだろう
せせらぐ大河を両腕に流し込み
そして立つだろう、蒼白い経帷子の輪郭は
さながら墓の端に崩れ落ちる塔のごとく。

不透明だ、すでに、僕はそこを通り抜け震えている、
その名が未だ「誰か」であったかのように、
僕の内の死骸全体がそいつと関係あり震えている。

駆け巡り蘇る感じがある、
磁力の働く顔から足の舐先まで、
音のない叫び、まるで犬の魂のごとく。

II

死を いかなる財にも、希望にも、空間にも、
だが刈入れをおこなう時には死を与えるな、
僕は乳を搾りその時に席を譲らねばならぬ、
だがこの貧窮のなかで僕の情熱が大きくなる。

僕はその時を名もなき国へ連れて行く
そこでは夜毎に急かされ自分が消える。
影は影をそこで貪り、僕はそこに顔を出す
夢想の壁が僕の跡を飲み込むにつれて。

それは生ではないし虚無でもない。僕の宵から

les enfants nouveau-morts⁷ errent dans l'entre-deux.
Transparentes clartés, apparues, disparues,

élans sans avenir, souvenirs sans passé,
décroître fait leur joie, expirer fait leur jeu,
et Psyché brûle en eux, les ailes étendues.

III

Je m'égaré par les pics neigeux que mon front
recèle dans l'azur noir de son labyrinthe.
Plus d'autre route à moi ne s'ouvre, vagabond
enfoncé sous la voûte de sa propre plainte.

Errer dans ce lacis et délirer ! Ô saintes
rêveries de la captivité. Les prisons
sont en moi mes prisonnières et dans l'empreinte
de mes profonds miroirs se font et se défont.

Je suis perdu si haut que l'on entend à peine
mon sourd appel comme un chiffon du ciel qui traîne.
Mais là-bas, clair pays d'où montent les matins,

dans ta prairie, Alice-Abeille, ma bergère,
si quelque voix, tout bas, murmure : « C'est ton père »,
va-t'en vers la montagne et prends-moi par la main.

IV

J'ai rêvé que je vous portais entre mes bras,
depuis la cour jusqu'à votre salon obscur.
Vous sembliez une sœur des chères créatures

新死児が出て 生と虚無の中間をさまよう。
透明な光が、あらわれ、消え、

跳躍に先はなく、記憶に過去はなく、
後退が彼らを喜ばせ、期限切れが遊戯となり、
プシュケは彼らの内に燃える、羽を広げて。

III

雪積もる山頂で僕は迷う その場所を僕の顔は
その迷宮の黒い紺碧のなかに隠している。
僕には他のどんな道も開かれない、放浪者
自らのうめき声の穹隅にはめ込まれた放浪者だ。

この網目をさまよひ 狂うこと！ おお束縛を
夢想する聖なる者よ。牢獄は
僕の内には僕の囚人となり いくつかの僕の
深い鏡の痕跡の中で作られ 壊れる。

僕はいと高き所をさまようがゆえ ちっとも僕の
声なき呼びかけは届かず まるで放られた空の雑巾
みたいだ。だがあそこ、明るい国から朝日が昇る、

君の芝に、アリス・アベイユ、僕の恋する羊飼いの、
もし声がいづつか、とても小さく、「君の父だ」と
ささやいたら、
山の方へと行き 僕を手で掴んでくれ。

IV

夢を見た 貴女を両腕に抱えるという、
宮廷から貴女の薄暗いサロンまで。
貴女は愛しい創造物の妹みたいだった

⁷ Un « nouveau-né » が「新生児」のため、「新死児」という造語で訳した。

que j'adore, mais je ne vous connaissais pas.

Il faisait une nuit de lune et de frimas,
une nuit de la vie, sonore d'aventures.
Tandis que je cherchais à voir votre figure,
je vous sentais légère et tremblante de froid.

Puis je vous ai perdue comme tant d'autres choses,
la perle des secrets et le safran des roses,
que le songe ou la terre offrirent à mon cœur.

Signes de ma mémoire, énigmes, tout me mène,
avec chaque soleil formé à si grand-peine,
au chef-d'œuvre d'un fort et lucide malheur.

V

Les poètes, un jour, reviendront sur la terre.
Ils reverront le lac et la grotte enchantée,
les jeux d'enfants dans les bocages de Cythère⁸,
le vallon des aveux, la maison des péchés,

et toutes les amies perdues dans la pensée,
les sœurs plaintives et les femmes étrangères,
le bonheur féerique et la douce fertilité
qui posait des baisers à leur front solitaire.

Et ils reconnaîtront, sous des masques de folles,
à travers Carnaval, dansant la farandole⁹,
leurs plus beaux vers enfin délivrés du sanglot

qui les fit naître. Alors, satisfaits, dans le soir,
ils s'en retourneront en bénissant la gloire,

僕の好きな妹、だが貴女と面識はなかった。

月が出て霧が濃い夜だった、
命をめぐる一晩、冒険で音がよく響く。
僕が貴女の姿を探していた合間、
貴女が軽やかで寒さに震えるのを感じていた。

そして貴女を見失った 他の数多のものと同じく、
秘密の真珠や薔薇のサフランといった、
夢想や大地が僕の心に送ってきたものだ。

僕の記憶の微、謎、すべてが僕を導く、
かろうじて形作られた毎日の太陽とともに、
強く聡明な不幸の傑作へと。

V

詩人たちは、いつか、大地へと帰るだろう。
彼らは思い出すだろう、湖や魔力をもつ洞穴を、
キチラ島の牧草地帯での子どもたちの遊びを、
告白の谷を、罪の家を、

それから 思考の中に迷う友人たち全員を、
うめき声をあげる姉妹や風変わりな女たちを、
妖精の降伏に甘美な矜持を
この矜持が孤独な詩人たちの顔に接吻したのだ。

また詩人たちは理解するだろう、狂人の仮面を被り、
カーニバルを経て、ファランドールを踊り、
自分たちの詩句がやっとなんかから解放される、と

これまで詩句を生んだ嘆きから。さあ、満足して、
夜には、詩人たちは栄誉を讃え戻ってくるだろう、

⁸ ギリシャ・ペロポネソス半島の南に所在する地中海の島。

⁹ フランス南部のプロヴァンス地方で踊られる 6/8 拍子の舞曲の名称。ジョルジュ・ビゼーが作曲した「アルルの女」の一曲に「ファランドール」があり、これが広く知られている。

l'amour perpétuel, le vent, le sang, les flots.

愛は永遠なり、風よ、血よ、流れよ。

VI

VI

Bruits lointains de la vie, divinités secrètes,
trompe d'auto, cris des enfants à la sortie,
carillon¹⁰ du salut à la veille des fêtes,
voiture aveugle se perdant à l'infini,

生命の遠くの音、秘められた神々しき、
自動車の警笛、出しな子どもたちの叫び、
カリヨンが祭りの前日に挨拶を告げる、
行き先を永久に失う盲目の車、

rumeurs cachées aux plis des épaisseurs muettes,
quels génies autres que l'infortune et la nuit
auraient su me conduire à l'abîme où vous êtes ?
Et je touche à tâtons vos visages amis.

音のない厚みに折り込まれ隠れたざわめき、
不運と夜以外のいかなる才が
君たちがいる深淵へと僕を誘えただろうか。
こうして僕は手探りで君たちの顔に触れる 友よ。

Pour mériter l'accueil d'aussi profonds mystères
je me suis dépouillé de toute ma lumière :
la lumière aussitôt se cueille dans vos voix.

こんなにも深い神秘の入り口に相応しくなるため
僕は僕の光を自ら引き剥がした。
すぐさま光は君たちの声へと摘まれる。

Laissez-moi maintenant repasser la poterne
et remonter, portant ces reflets noirs en moi,
fleurs d'un ciel inversé, astres de ma caverne.

いままた、僕に隠し扉を通らせてくれ
僕の内の黒い反射を手に、また行かせてくれ、
逆さまになった空の花、僕の洞窟の星を手に持ち。

VII

VII

Bois cette tasse de ténèbres, et puis dors.
Nous prendrons ta misère ainsi qu'une couronne
et nous la porterons aux jardins de la mort.
Alors toi, comme un somnambule qui frissonne,

この闇のカップをお飲み、そしたら寝るんだよ。
僕たちが君の惨めさと冠を取ってやろう
そしてそれを死の庭へと運んでやろう。
すると君は、身震いする夢遊病者のごとく、

te glissant par la porte où ne passe personne,
tu t'en iras cueillir le myrte aux rameaux d'or.
Son éclat et celui de la rouge anémone,
dans la nuit rajeunie, te guideront aux bords

誰も通らない扉に滑り込み、
金の枝のギンバイカを摘みに行ってしまうだろう。
その花と赤いアネモネの鮮やかさが、
再度訪れた夜、君を端へと導くだろう

¹⁰ 教会の塔に吊るされた、鍵盤ないし時計じかけで奏でられる鐘。

de la vraie vie et du pur accomplissement.
Là les songes sont sûrs, terribles et puissants.
Par le bleu matinal d'un éternel demain

ils viendront tous à ta rencontre, âme guérie,
et tu reconnaîtras, se tenant par la main,
tes grandes sœurs : Amour, Liberté, Poésie.

VIII

Il n'y avait que des troncs déchirés,
que couronnaient des vols de corbeaux ivres,
et le château était couvert de givre,
ce soir de fer où je m'y présentai.

Je n'avais plus avec moi ni mes livres,
ni ma compagne, l'âme, et ses péchés,
ni cette enfant qui tant rêvait de vivre
quand je l'avais sur terre rencontrée.

Les murs étaient blanchis au lait de sphinge
et les dalles rougies au sang d'Orphée.
Des mains sans grâce avaient tendu des linges

aux fenêtres borgnes comme des fées.
La scène était prête pour des acteurs
fous et cruels à force de bonheur.

IX

Traduit de Hugo von Hofmannsthal

Une coupe au bord de la bouche,

本当の生、純粹な達成の端へと。
そこでは夢想は確かで、恐ろしく力強い。
永遠なる明日の朝の青を通り、

どんな夢想も君に会いにくるだろう、魂は癒え、
君はそうだとわかるだろう、手に収められている、
君の姉妹たちのこと。すなわち愛、自由、詩。

VIII

引き裂かれた幹だけがあつた、
酔った鴉が飛び冠をつくっていた幹だけが、
城は霧氷に覆われたいた、
その鉄の夜、僕はそこにいた。

僕にはもう何もなかった 僕の本も、
僕の仲間も、魂も、その罪も、
この地上でかつて出会ったときに
生きることをとあれほど夢見たあの子も。

スフィンクスの乳に壁は白く染まり
オルフェウスの血で舗石は赤く染まった。
容赦なき両手が洗濯物を干していた

妖精たちのように隻眼の窓に。
舞台は整っていた 幸福だったので
狂い残忍になった役者たちのための舞台が。

IX

フーゴ・フォン・ホーフマンスタールからの翻訳

口元には一杯の盃、

elle allait d'un si ferme pas
et la main si sûre que pas
une goutte ne se versa.

Il montait un cheval farouche.
Si sûre et ferme était sa main
que, frémissant au coup de frein,
le cheval s'arrêta soudain.

Et pourtant, quand la main légère
à l'autre main gantée de fer
cette simple coupe tendit,

ils tremblaient si fort, elle et lui,
que les mains ne se rencontrèrent,
et le vin noir se répandit.

X

*Rose d'Alexandrie*¹¹... C'était une chanson
qu'étoilaient et striaient les fusées de la plage.
Et la nuit éclatait de partout, comme à l'âge
où la première fête entre dans la maison.

Oui, une joie d'enfants nous pressait au balcon
d'où nous contemplions les danses du village.
Et pourtant, bien-aimée, que d'ombres sous ton front,
et que nos mains tremblaient en tournant cette page !

Mais dans l'été, c'était bien lui, dont brusquement
la griffe avait foncé sur nous, l'espoir dément !
Il était là ! – Il est peut-être là toujours.

かくも揺るぎない足取りで彼女は行き、
かくも手は確りとしていたので、
ひとしづくさえ注がれなかった。

彼は犂猛な一頭の馬に跨った。
かくも確かで揺るぎなかったのは 彼の手
だから ブレーキに身を揺らし、
馬は突然止まった。

だが、手が軽く、
もう一方の鉄の手袋をはめた手へと、
この飾らない盃を渡したとき、

彼らはかくもつよく震えていた、彼女と彼は、
だから両手が出会った、
そして黒いワインがこぼれ広がった。

X

アレクサンドリアの薔薇…… 浜辺の火箭が
星を散りばめ線を引くひとつの歌があった。
夜はどこでも輝いたいた、まるで
家で初めての祝宴が始まる齢のように。

そう、子らの喜びが僕たちをバルコンへと急かした
そこから村の祭りを僕たちはよく眺めたものだ。
しかし、愛する女よ、君の額の下の影たちが、
僕たちの両手が このページを捲り震えていた！

だが夏には、まさしくそれだった、突然その爪が
僕たちに襲いかかってきた、とてつもない希望が！
希望はそこあった！ — おそらくいまでもいる。

¹¹ イベリア半島に自生する植物で、ポルトガルとスペインの山々に分布している。

Car nous sentons rôder le long de notre vie,
à travers la forêt où nos pas sont plus lourds,
une bête farouche et jamais assouvie.

XI

Compagne, tu n'auras connu de mon étoile
que la face nocturne et les yeux aveuglés
et cette bouche dure et tant d'aridité,
rien que l'abrupt aspect d'une ombre capitale.

Pour qui donc mes regards et les eaux musicales
que contenaient mes mains au temps de la clarté ?
Mes promesses d'Asie se sont tôt écoulées
vers l'autre extrémité de la sphère fatale.

Retourne à ta lumière et penche-toi sur toi,
- car toi, ton ange ne cessait de croître, - et sois
une Narcisse sans orgueil, désir ni larmes,

confuse et rougissant de se savoir trop belle.
Toi seule auras permis que j'offre à mes autels
une félicité faite à force d'alarmes.

XII

Les songes assidus qui par la main se tiennent
et de tous mes parcours font un seul chemin noir
n'y soufflent une aussi dévastatrice haleine
que parce qu'en ton cœur, témoin de mon histoire,

je ne puis réfléchir qu'illusions et peines,
les astres languissants d'un errant promenoir,
une conjonction d'accords faux qui se traînent,

僕たちは自分たちの人生をさまようよう感じ、
自分たちの足音が重々しくなる森を横切る、
獐猛で決して満たされない一匹の獣だから。

XI

友よ、僕の星で君が知るのは
夜の顔と見えない目だけのはずだ
そしてこの固くひどく乾燥した口、
この暗く影差す首都の不躰な側面を除き何も無い。

なら誰のために 僕の視線と音楽的な水はあるのか
光の時に僕の両手が持つそれらは。
僕のアジアの約束は早くも流れ去った
宿命の球体のもう一方の先端へと。

君の光へと戻り 君に寄りかかれ、
一君は、君の天使は成長し続けたのだから、一また
謙虚で、欲も涙もない水仙の女であれ、

自分が美しいと知り当惑し頬を赤らめて。
君だけが許してくれただろう 僕が祭壇に
サイレンが鳴ることで作られた至福を捧げるのを。

XII

たゆまぬ夢想 それは手におさまっていて
いかなる道程もをたったひとつの黒き道とする
この夢想はそこにこんなにも荒廃した吐息のみ吹く
なぜなら君の心、僕の物語の証人の内に、

僕が反射させるのは幻滅と苦痛だけだから、
当て所ない散歩道に倦んだ星々、
這い進む偽りの調停を結ぶ出会い、

sans écho ni mesure, aux défauts des miroirs.

Si je m'abreuve de ton ciel, c'est que ton ciel
s'est rempli jusqu'aux bords de ma coupe de fiel.
Mes yeux qu'en ton douloir mon douloir éblouit,

trous de flamme béants, alentour multiplient,
comme en la roue du paon autant de bleus ocelles,
tes regards déchirés aux rochers de ma nuit.

XIII

La rue monte jusqu'à la blanchisserie bleue
et découpe, déserte, un ciel de craie. Tu passes,
pèlerin des pavés livides et des places
où grelottent les bancs et les kiosques poudreux.

Quelle stupeur se peint où tu portes les yeux,
dans l'immobile cri des affiches, les glaces
figées des magasins naufragés et la face
de toutes ces maisons en attente du feu !

Va-t'en de ton chemin, sors de tous les chemins,
toi qui n'as pu jamais obtenir un destin !
C'est l'écho de tes pas qui forme un tel silence.

Mais que vitres et toits enfin vibrent de rire,
et les jardins des rois que ta seule présence,
sous le poids de sa cendre, empêche de surgir !

XIV

Comme le sens caché d'une ronde enfantine,
qui n'a rêvé d'entendre un jour sa propre voix

反響も音階もなく、鏡が欠ける。

もし僕が君の天空で喉の乾きを癒すなら、君の空が
端っこだまで僕の苦しみの盃で満ちていたから。
君の苦しみの内に僕の苦しみが惑わせる僕の眼が

大きく開けた炎の穴が、そのあたりで拡大する、
青の斑模様と同じ数の孔雀の車輪の内のように、
僕の夜の岩には引き裂かれた君の視線。

XIII

道は青の洗濯場まで登る
そして白墨の空を切り、見限る。君はゆく、
蒼白い舗石や埃っぽいベンチと四阿が震える
場所を巡礼する君よ。

どんな驚きが描かれるのか そこで君は眼を
壁紙が貼られ動かぬ叫びへと、難破した店に
固定された氷へと、火がつくのを待っている
これらすべての家の正面へと運ぶ！

自分の道から立ち去れ、あらゆる道から出ていけ、
運命など決して持ちえぬ君よ！
君が生む足音の響きこそがそんな沈黙を形づくる。

だが窓硝子や屋根がついに笑い震えると、
ただ君の存在だけが、その灰の重さの下に、
王の庭があらわれるのを阻止するのだ！

XIV

子供じみた輪に隠された意味のように、
いつか自分自身の声を聞くのを夢見ぬのは誰か

et de voir son regard et de saisir le signe
que fait en s'éloignant la ligne de nos pas ?

Ô mal aimée, le temps, cet imposteur insigne,
nous volait notre temps et s'envolait, narquois,
nous laissant un lambeau de sa chanson maligne
pour nous bercer. Pourtant il me semblait parfois

que cette vie n'était pas tout à fait la nôtre.
Mais non, vois-tu, c'était bien elle et non une autre.
La fille errante, aux mains brisées, venue s'asseoir,

un soir de vent, au coin de la cheminée froide,
mais regarde-la donc, regarde son regard
terrible d'oiseau triste et d'étoile malade.

XV

Lorsque nous entrerons dans cette ville chinoise,
je boiterai un peu, mais je connaîtrai l'amour.
Les pauvres fous, accroupis sous des charrues, aux bases
des murailles fiévreuses, des portes et des tours,
s'envoleront soudain pour nous guider aux citernes,
et une tiède lune, sœur de la fin du jour,
nous accueillera par son cortège de lanternes
et sa batterie de cymbales et de cris sourds.

J'irai, m'accrochant aux plis de ta robe chérie
et aux baisers furtifs de tes yeux de paradis,
de tes yeux de musique, de tes yeux de prière.

Oh ! Ce sera une récompense inattendue
que de découvrir, comme deux points d'astres perdus
et rallumés, le souffle de nos âmes légères.

自身の視線を見たり微を掴むのを夢見ぬのは誰か
離れながら僕たちの歩みを線とするのは何か。

おお愛されぬ女よ、時が、この素晴らしい詐欺師が、
僕らから僕らの時間を奪い飛び立った、冷笑的に、
僕らに抜け目のない歌の切れ端を残していく
僕らをあやすために。だが時にはこう思う

この生は完全には僕らのものではないのだと。
違う、わかるね、生は僕らので他人ではなかった。
さまよえる娘がぼろぼろの手で、座りにやってきた、

ある風吹く夜、冷えた暖炉の端に、
ほら彼女を見てごらん、彼女の視線の先を見て、
悲しき鳥と病に冒された星の悲惨。

XV

僕らがこの中国の街の地に潜るときには、
僕は足を引きずり、けれども愛を知るだろう。
貧しき狂人たちが、犁の側や、熱っぽい城壁の
礎の側にしゃがみ込む、扉や、塔の礎の側に、
狂人はつと僕らを貯水槽に連れに飛び立つだろう
すると生温い月、一日の終りの娘が、
列をなす提燈やシンバルのけたたましい音や
音のこもった叫びで僕たちを歓迎するだろう。

僕は行くだろう、君の大切な服の折りに
楽園の君の眼のつかの間の抱擁にくっつきながら、
音楽的な君の眼の、石の君の眼の。

おお！ 予想だにできなかった報酬だ
見失われ燃えている星たちの二つの点のように、
軽やかな僕らの魂の息吹を見つけられるとは。

XVI

Admoto occurrere fato

(Lucain, IV, 480)

Viens, nous le trouverons au détour du chagrin,
au niveau de la nuit, à fleur de transparence.
Nous n'avons jusqu'ici connu que sa semblance,
mais à pas de voleur¹² lui-même approche enfin.

Nous-mêmes qu'étions-nous sinon double silence,
couple d'ombres troublées d'unir de fausses mains ?
Et nos mains, revêtues de vérité soudain,
béniront l'effrayant messenger qui s'avance.

Il fait sombre. Il est tard. Mais que s'attarde encore
le noir épais de toute cette vie de mort !
Le reste ne fût-il qu'un fil de crépuscule,

un horizon de sang dans le calice amer
que devant notre soif l'ange en riant recule,
nous terrasserons l'ange et nous boirons la mer.

XVII

Éloignez-vous sur la pointe des pieds.
Prenez la barque et ne revenez plus.
Retournez tous chez vous avec vos fées,
vos ombres étrangères et vos luths.

Bien sûr, pour vous, beaux promeneurs, ce fut

XVI

Admoto occurrere fato

(ルカヌス、IV、480)

おいで、悲嘆から帰り僕らはそれを見つけ出す
夜の高さに、透明さとすれすれに。
僕らはこれまでそれに似たものしか知らなかった、
だが盗賊のような足音でそれ自体がついに近づく。

僕ら自身はあるいは二重の沈黙、偽りの手たちを
結びつけるのを邪魔された影のつがいだったのか。
そして僕らの手は、突如真実を身にまとい、
前に進む恐ろしい伝達者を祝福するだろう。

外は暗い。もう夕刻だ。だがまだ
この死者の生全体にぶ厚い夜がぐずっている！
残っているのは黄昏の一本の糸だけだったろうか、

苦い聖杯の中にある血の水平線
僕らの乾きを前に笑いながら天使がそれを退ける、
僕たちは天使を投げ飛ばし海を飲むだろう。

XVII

君たち つま先で立ち離れよ。
小舟に乗りもう戻ってくるのを止めよ。
妖精とともにみな自分たちの家に帰宅せよ。
自分たちの風変わりな影やリュートとともに。

もちろん、君たちに良き散歩者たちにとって、

¹² « à pas de velours » = « sans faire de bruit en marchant » 「足音を立てず」との言葉遊びか。

une aventure neuve et enchantée.
Emportez-la comme un bijou volé,
un feu qui tremble encore, un livre lu.

C'est ici la chambre des anges morts.
Laissez-nous seuls dans notre vie déserte,
devant ces mains et ces ailes inertes.

Il s'est passé ici, depuis l'aurore,
une effrayante histoire, étrange et tendre,
et que le désespoir seul peut comprendre.

XVIII

Celui qu'étoiles, vous avez pris comme cible
de vos cris anxieux et qu'allez pourchassant,
ne vous irritez plus s'il se rejette errant
aux bords du monde ardent et se fait invisible ;

rien qu'un méchant fantôme, une ombre inaccessible
et pareille – vous rappelez-vous ? – à l'Enfant
Prodigue de Rainer Maria s'enfuyant
pour ne pas être aimé de cet amour terrible.

Exigence des cœurs diffuse dans la nuit,
beaux regards confiants, détournez-vous de lui.
Et vous, mortes et morts, alourdis de pardons,

écarterz votre vol de sa déserte grève.
Ah ! c'est lui, cerf en pleurs, courbant enfin le front,
qui vient vous retrouver chaque soir dans ses rêves.

XIX

それは真新しく喜ばしい冒険だった。
その冒険を盗まれた宝石のように持ち帰れ、
未だ震える火のように、読み終えた本のように。

ここが天使たちが死んだ部屋だ。
無味乾燥の僕らの生の中でひとりにさせてくれ、
生氣のないこれらの手と羽を前にした僕らを。

曙光が出てから、ここで起こったのだ、
恐るべき、異質で優しい物語が、
その物語を理解できるのは唯一絶望だけだ。

XVIII

星よ、君たちが目標と掲げていたもの
不安げな叫びの目標として 追い立てにいけ、
もう腹を立てるな もしその目標がさまよい
激しい世界の端へと身を預け見えなくなっても。

意地の悪い幻影だけがある、辿り着けず
「子供」に似た影だけが一覚えているかい—
ライナー・マリアを浪費する者が逃げ出している
この恐ろしい愛に愛されないように。

心の要求が夜に拡散する、
信頼のある美しい視線、そこから目をそらせ。
死した女や男、赦して重くなった君たちよ、

何もない砂浜から離れて飛ぶのだ。
ああ！額をかかめている、涙を流す鹿が、
自分の夢の中に毎夜君たちを見つけ出す鹿が。

XIX

Je suis Jean

V.H¹³.

Je suis Jean. Je ne viens chargé d'aucun message.
Je n'ai rien vu dans l'île où je fus confiné,
rien crié au désert. Je porte témoignage
seulement pour le songe d'une nuit d'été.

Pour le songe d'une jeunesse retrouvée
sous les chaudes constellations d'un autre âge,
et parce que je veux entendre le langage
brûlant et vif de ce firmament éclaté.

Quant à moi, je ferai silence, étant indigne
de nouer le cordon des approches insignes
qui monteront vers l'aube ou d'apaiser mon front

sur le scintillement des hymnes révélées :
précurseur et disciple en toi s'aboliront,
ô nuit de l'ombre blanche et du total reflet !

XX

À maison de feu ciel de pierre,
mais à ciel de pierre aile d'ange
bruisante en ripostes de fer.
Au clair de l'incessant échange,

c'est toi, le moindre souffle d'air,
langue légère, qui déranges
le diamant des vents contraires
et construis des règnes étranges.

僕はジャンだ

V.H.

僕はジャンだ。どんな言伝も僕は持って来ていない。
僕が閉じ込められた島では何も見なかったし、
砂漠では何についても叫ばなかった。ただ証言を
する 夏の夜の夢のために。

別の齡の熱を帯びた星座の下で
再び見つかった青春の夢のために、
あるいは僕は言葉を耳にしたいから、
燃え生命に満ちた光り輝く蒼穹の言葉を。

僕とは言えば、沈黙するだろう、素晴らしくも
接近する紐同士を結びつける資格などないのだ
こうした接近は夜明けへと向かうものだから

あるいは僕の顔を安らげる資格もない 明るみに出
た讃歌のきらめきの上で。

君の内で先駆者や後継者が消えて無くなるだろう、
おおいき影とまったり反射の夜よ！

XX

石が燃える空の家で、
石でできた天使の羽の空で
鉄の反復運動の内に音を立て羽ばたく羽の空で。
絶え間ない交換の光を浴びて、

君だ、ほんの微かに吹く風よ、
軽やかな言葉、君が
反対に吹く風の金剛石をかき乱す
そして異質な統治を生み出す。

¹³ ヴィクトル・ユゴー、「Écoutez. Je suis Jean. » (*Les contemplations*) では « J'ai vu » が繰り返されているのに対し、カスーの詩には « Je n'ai rien vu » と書かれている。

Vive aurore se fasse airain,
ou roc le vapoureux de destin :
s'en rira l'incrutable centre

d'où s'inspire un plus fier serpent.
Il neige. Et Noël, dans son antre,
couve quel métal étonnant ?

XXI

Tombeau d'Antonio Machado

Âme sainte, la Charité,
guidant les saintes de la nuit,
aborde aux lieux déshonorés
que ta torche en vain purifie.

Elles vont délivrer tes cendres
d'un pays qui n'est plus que sable
et, vol d'oiseaux clairs, les répandre
à travers un ciel respirable.

Là tu trouveras l'odeur
de tes profonds étés en pleurs.
Il ne restera plus jamais

qu'une urne brisée de colère,
à Collioure, au pied des pierres
où pourrissent les prisonniers.

鮮やかな極光が青銅になる
あるいは岩 運命のおぼろげなものに。
それをあざ笑う 象眼された中心

その中心から湧き上がる 誇り高き蛇。
雪が降る。クリスマスだ、蛇の巣窟に、
どんな驚くべき金属が生まれるだろうか。

XXI

アントニオ・マチャードの墓

聖なる魂、「慈愛」が、
夜の聖女たちを導き、
名誉を傷つけられた場所で語る
君の松明が清めも虚しい、と。

聖女たちが君の灰を解放するだろう
砂でしかないある国から
そして、光る鳥が羽ばたき、その灰を
呼吸する空いっぱい撒き散らすだろう。

そこに君は香りを見つける
涙でいっぱいの深き夏の香り。
もう残っているのは

怒りで壊れた水瓶ひとつだけだろう、
コリウール¹⁴の、石の側にある水瓶
そこで囚人たちは朽ちていく。

¹⁴ 1939年、スペイン内戦で敗れた数十万人の共和国軍派がフランスへ逃れた。スペイン難民は収容所に集められ、特に危険視された人々（一部のアナキストや共産主義者）はコリウール城の特別な収容所に入れられた。1000人近くの人々が刑務所のような収容所に入れられ、人間以下に扱われた。1939年12月にコリウール収容所が閉じられると、彼らはアリエージュ県のル・ヴェルネ収容所へ移送された。1939年2月22日に亡くなったマチャードは、この地に死んだ。

XXII

En tous pays, depuis toujours, les ouvriers
meurent. Le sang des ouvriers baigne les rues.
Les ouvriers crient et tombent dans la fumée.
Le feu, le froid, la faim, le fer et la roue tuent

les ouvriers. En tous pays de pierres nues,
d'arbres pourris, de grilles d'hospices rouillées,
depuis toujours, par la misère des journées,
le troupeau des journées saignées et abattues...

Ô Dieu de justice qui régniez, non aux cieux,
mais dans le cœur de l'homme, au cœur de sa colère,
ne vous réparez-vous donc jamais sur la terre ?

Seigneur des forts et de la force, ouvrez les yeux !
Les bouches sont muettes, les poings sont liés,
et la chaîne est très longue. Mais les ouvriers ?

XXIII

La plaie que, depuis le temps des cerises,
je garde en mon cœur s'ouvre chaque jour.
En vain les lilas, les soleils, les brises
viennent caresser les murs des faubourgs.

Pays des toits bleus et des chansons grises,
qui saignes¹⁵ sans cesse en robe d'amour,
explique pourquoi ma vie s'est éprise
du sanglot rouillé de tes vieilles cours.

Aux fées rencontrées le long du chemin

XXII

どんな国でも、いつでも、労働者たちが
死ぬ。労働者たちが道を血で染め上げる。
労働者たちは叫び煙へと落つ。
火が、寒気が、飢えが、鉄が、車輪が殺す

労働者たちを。石がむき出しのどんな国でも、
木が腐り、養護院の格子窓のあるどんな国でも、
いつでも、日々の惨めさによって、
血が流れ打ちひしがれたた一群の日々によって…

おお正義の神が支配するのは、天国ではなく、
人間の心、怒る人間の心だ、
君たちはこの地上に広まったのではなかったのか。

城塞と軍の主よ、目を見開き給え！
口は押し黙り、拳はくつついたままだ、
そして鎖はとても長い。では労働者たちはどうだ。

XXIII

さくらんぼの実る頃から、僕が心に
負ってきた傷口が毎日開いている。
虚しくも、リラも、太陽も、そよ風も、
街の壁をやさしく撫でにやってくる。

青い屋根に灰の歌の国、
愛の服をまとい絶えず血を流すこの国が、
どうしてなのか説明する 僕の人生が君の古い
宮廷で錆びた嘆き節に取り憑かれているわけを。

巡り合った妖精たちの道をたどり

¹⁵ 二人称単数？

je vais racontant Fantine et Cosette¹⁶.
L'arbre de l'école, à son tour, répète

une belle histoire où l'on dit : demain...
Ah ! jaillisse enfin le matin de fête
où sur les fusils s'abattront les poings !

XXIV

Briques et tuiles, etc.

Verlaine¹⁷

Plomb, zinc et fer,
ô les charmants
petits enfers
pour les amants !

Mer et désert :
l'événement
n'a rien à faire
pour le moment.

À tous nos coups
le néant joue
échec et mat.

L'histoire close
plus jamais n'ose
produire un Acte.

XXV

僕は行く ファンティーヌとコゼットを語りて。
学校の木が、今度は、繰り返す

美しい物語を。いわく、「明日は……」
ああ！ 祝宴の朝がやつとあらわれる
この日 銃に拳が立ち向かう！

XXIV

レンガと瓦、等々。

ヴェルレーヌ

鉛、亜鉛、そして鉄、
おお魅力的で
かわいい地獄
恋人たちのための！

海と砂漠
出来事には
何もできないことがない
さしあたっては。

僕らの一撃のどれもこれも
虚無が戯れる
王手がかけられた。

物語は閉幕し
今後決して
幕を創ることはないのだ。

XXV

¹⁶ ここにもユゴーへの参照がみられる。

¹⁷ Paul Verlaine, « Walcourt » (*Romances sans paroles*, 1874) の書き出しは次の通り。 « Briques et tuiles, / Ô les charmants / Petits asiles / Pour les amants ! ».

Paris, ses monuments de sang drapés, son ciel
couleur aile d'avion, dans le soleil couchant,
j'ai tout revu, et j'entendais renaître un chant
lointain, pareil à une levée d'étincelles.

J'ai si longtemps aimé, il y a si longtemps,
cette ville dans une chambre aux murs de miel
et d'aube vieille, au plafond bas. Et dans le gel
du miroir pâle un fier visage méditant.

Et les meubles étaient d'acajou. Sur le marbre
une flûte. Par la vitre plombée, les arbres
– des marronniers – dessinaient leur feuillé, très vert.

Je sais : j'étais debout, près de cette fenêtre,
et les pavés retentissaient d'un bruit de fête,
une fête de tous les jours, comme la mer.

XXVI

À peine si le cœur vous a considérées,
images et figures
que la succession des concerts fait durer
plus que tout ce qui dure,

ô mes belles amours, dont les pays dorés
reflètent la peinture,
et déjà les adieux qui vont nous séparer
s'égalent à vos pures

éternités. Oui, ce sera l'unique fois
que, s'étranglant, nos voix loueront enfin vos voix
de ne jamais se taire.

パリのゆったりとひだを寄せた血の記念碑、その空
の色 飛行機の翼、日が沈むとき、
歌が再び生まれるのを僕はまたも見て、聞いていた
遠くの歌、沸き立つ火花と同じような歌。

僕はかくも長く愛していた、もうずっと前、
はちみつの壁に囲まれた部屋の中のこの街を
古い夜明けの壁、低い天井のこの部屋の。蒼白い
鏡が氷る中 臆想し自信に満ちた顔がある。

家具は赤褐色だった。大理石の上に
フルートがひとつあった。鉛色の窓硝子を通して、
木ターマロニエだーが緑陰を描いていた、濃い緑の。

僕は知っている。この窓の近くに立っていたのを、
舗石に祭りの音がよく響いていた、
毎日続く祭りだ、まるで海のように。

XXVI

心はかろうじて君たちをみとめる、
イメージとフィギュールを、
それらは幾多の音楽祭によって長続きするだろう
続いているどんなものよりも、

おお僕の雅な恋人たち、黄金色の君たちの国は
絵画を映していて、
もうすでに僕らを分かち別れば
等しい 君たちの純粹な

永遠に。そうだ、たった一度だけ
喉がつまりつつ、僕らの声がついに褒め称える
君たちの決して黙らぬ声を。

Va, brise-toi joyeusement, cœur désolé,
car le plus démuné des mortels meurt comblé
d'avoir aimé la terre.

XXVII

Ami, s'il ne fait pas assez noir dans ta nuit,
c'est que, je ne sais où, ton beau château s'apprête
à célébrer pour toi quelque étonnante fête
dont un éclat déjà glisse jusqu'à ton lit.

Un empire inconnu de pompe et de conquête,
comme un bond dans le creux des ténèbres tapi,
c'est lui qui te contraint à vouloir plus parfaite
l'ombre où ton encre et tes rideaux lourds s'ingénient.

Coupe de lait obscur percée de traits solaires,
toute offrande à la mort retourne à la lumière,
et la fleur des secrets expire en fruit de foudre.

Tu le sais, favori des visites d'hiver,
et que c'est au plus dur du mur de fer que s'ouvrent,
comme en des chairs blessées, les portes de la mer.

XXVIII

Ce seul plaisir nourrit mes heures solitaires,
de redire à mon cœur que je sais ce qui fut.
Je mets ma certitude en des romans confus
et peuple de destins un continent polaire.

Je répète qu'un soir une jeune chimère
fit résonner la corde amoureuse du luth
perdu sur la table de l'auberge. Et j'ai vu

さあ、喜びに満ちて砕けよ、君 悲嘆にくれた心よ、
なぜって 死すべき者に最も足りぬものは
大地を愛したということに満たされ死ぬのだから。

XXVII

友よ、君の夜がまだ十分暗くないなら、
どこにあるのか知らぬ、君の城が君のために
何らか驚きの宴を祝う準備をしているということ
その宴の輝きはもう君の寝床まで滑り込んでいる。

盛大で抗いがたい未知の帝国、
まるで暗闇に広がる穴へ跳躍するがごとく、
この帝国こそが君に欲望するよう強いる
君の墨と重い窓掛で工夫を凝らした完全な影を。

太陽の線が貫く暗い牛乳のカップ、
死者への貢物はなんであれ光へと帰す、
秘密の花は雷の果実の内に尽きる。

君は知っている、冬の訪れの寵児よ、
開くのは 傷つけられた椅子のような
最も堅牢な鉄の壁の中だと、海の扉が。

XXVIII

この唯一の喜びが僕の孤独な時間を養っている、
かつての姿を僕のよく知る心へと還元するよう。
幾編かの雑多な小説に僕の確信は置かれていて、
極の大陸へと運命の人々が置かれている。

僕は繰り返し言う 年端も行かぬ怪物がある夜
愛にあふれるリュートの弦をかき鳴らしたのだと
このリュートは宿屋の机で失くなったもの。僕は

le voyageur traîner son secret sur la terre. ¹⁸

Après tant de hasards un prisonnier qui meurt
entend comme un adieu la chanson du pêcheur
dans le soleil du golfe. Et il y eut, profonde

amie, ô fantaisie, ces chers et brefs moments.
La vie s'est refermée sur quelques purs amants.
Une main a passé sur la face du monde.

XXIX

Habileuse des morts, fais naître une princesse
de cette morte nue comme un galet des flots.
Suscite sous tes doigts les plus riches caresses
qui jamais aient surpris la moelle de ses os.

Que palpite la nuit dans le bleu de ses tresses
et que la lune en feu découvre ses yeux clos.
Verse un émail de neige dans ses seins et presse
ses bras vides sous de splendides oripeaux.

Je la vois désormais assise dans l'espace,
élevant une fleur à hauteur de ma face,
ou marcher d'un pas dur comme sur des remparts,

heureuse, oh ! bienheureuse, et de traîner si fière
la flûte et le tambour fascinés des regards
dans le satin de son frisson vif, ma vipère.

XXX

旅行者が自分の秘密を大地へと引きずるのを見た。

たくさんの偶然の後 ある死する囚人は
別れとして罪人の歌を聞く
入り海の太陽の中で。とても親しい女友達、

おお幻想よ、貴重だが短いこの瞬間があったのだ。
生は幾人かの純粋な愛人たちへと閉じ込められた。
片方の手が世界の顔へと伸びた。

XXIX

死者たちの衣装方の女性よ、王妃を甦えさせよ
流れる水のひとつの小石のような裸の死者から。
君の指元で一番豊醇な愛撫をせよ
かつて彼女の骨の髄を驚かせた愛撫を。

三編みの青の中 夜が動悸させますよう。
燃える月が彼女の閉じた眼を発見しますよう。
彼女の乳房の中に雪の七宝を流せ そして
麗しき美辞麗句の下でか空虚な両腕を押しつけよ。

今では僕は彼女が空間に腰掛けているのを見る、
僕の顔の高さまで一輪の花を持ち上げて、
城塞の上に行くように決意のこもる足取りで歩く、

幸せな女だ、おお！ 幸福な女よ、誇り高く
視線に魅了された横笛と太鼓を生き生きと
身を震わす繻子に包み持ち歩く、僕の鎖蛇よ。

XXX

¹⁸ ポエジー/ガリマール版だと « le voyageur tramer son secret sur la terre. » となっており、「旅行者が地上で秘密を織るのを見た」という風に訳せる。

Squelette d'or au long des murailles scellées,
le dormeur éveillé promène sa misère
victorieuse et le trésor émerveillé
d'une ingénuité indulgente aux chimères,

et vous, fontaines obstinées des cimetières,
gorges des rossignols, ô ruisselants métiers,
cordes dans le matin, marteaux, roues dentelées,
cris, fleurs, cercueils, moulins à pains ou à prières...

Et le scribe est heureux, et la plume est heureuse,
et l'arpenteur, le peintre, et la main rigoureuse,
et l'œil numérateur, et les splendeurs des jours

égales aux splendeurs que racontent les nuits.
Adorés nonchalants, passez ! Cueillez nos fruits !
Ravissez nos raisins et nos pommes d'amour !

XXXI

Qu'il soit au moins permis à cette lyre obscure,
consternée sous la croix brouillée des galeries,
de relever, dans un éclair, sa voix meurtrie
et de t'apercevoir, bel athlète futur.

Glaive sur l'escalier des monstres assoupis !
Père du long matin, fils de la pourriture,
c'est toi qui briseras les os et les jointures
de ce double accroché comme une maladie

à des corps déjà lourds à traîner dans les veilles,
mais désormais joyeux de vomir le sommeil.
Les yeux ne voudront plus dormir. Midi sans trêve

arrachera leur ombre aux pieds des messagers.

固く閉ざされた壁に沿ってゆく黄金の骸骨、
眠る者は目が覚め惨めな状態なままでいる
勝利という惨めな状態を　そして怪物に対して寛容
で工夫が凝らされた素晴らしい宝がある、

そして君たちがいる、墓の側でかたくなに流れる泉、
サヨナキドリの喉よ、おお水の流れる仕事よ、
朝に鳴る弦、金槌の音、ぎざぎざの車輪、
叫び、花、棺、パンや石を引く機械たちよ……。

書く者は幸せだ、筆もまた幸せだ、
測量士も、画家も、厳しい寒さの手も、
数を数える目も、日々の壮麗さも

夜が語る壮麗さと等しく幸せなのだ。愛らしい
無頓着さよ、通れ！　僕らの果実を、摘め！
僕らの愛のぶどうとりんごで心を奪われよ！

XXXI

少なくともこの晦渋な豎琴が、
画廊で混濁した十字架の下で愕然とした豎琴が、
雷光に、痣のできた声を立ち上らせませう
そして君が、未来の良き闘技者に気がつけませう。

まどろむ怪物の階段にある剣よ！
長い朝の父に、腐敗の子、
骨や関節を砕くであろうは君だ
これらは病のように二重に結びついている

幾つもの昨日を這うというすでに重たい攻撃に、
だが今では眠りを吐き出し喜んでいいる。
眼はもう眠りを求めないだろう。休みなき真昼が

眼の影を伝達者の歩みから引き抜くだろう。

Oh ! ce soir soit pour nous le dernier soir tombé,
et puisqu'il faut rêver, rêvons la mort des rêves.

XXXII

L'univers insulté peut tenir sa vengeance,
les jours renaître au jour et les soirs consolés
répandre leur rosée de sang et d'innocence
et s'ouvrir à la nuit comme des mains lavées.

Revanche dans le ciel, totale et sans clémence !
Oui, le tonnerre peut soulager la forêt.
Mais toi, tu n'obtiendras pour toi que le silence
qui suit l'effacement de la chose jugée :

Le blanc silence aux ailes de neige éperdues,
dont le cri forcené mesure l'étendue
de l'assouvissement suprême.

Au point où le mépris toute digue¹⁹ a rompue,
cœur près de se briser, il ne te reste plus
qu'à mépriser le mépris même.

XXXIII

Quel est ton nom ? – Constance²⁰. – Où vas-tu ? – Je m'en
viens
de toi-même et retourne à toi-même. – Soulève
ce linceul de ta face, et que je sache au moins
si tu ressembles à la sœur d'un de mes rêves.

おお！今夜が僕らのために落つ最後の夜であれ、
夢見なければならぬから、夢たちの死を夢見よう。

XXXII

侮辱された宇宙は復讐を果たすことができる、
日々は白日に甦り慰みの夜々は
自分の血と純真の露を撒き散らし
洗った手のような夜へと開かれることができる。

天空での報復、それは完全で容赦ない！
そうだ、雷鳴は森を解放することができる。
だが君は、自分のために手に入れるのは沈黙だけ
裁きの物を消し去ることへと通じる沈黙だけ。

度を失ったように狂う雪の羽の沈黙は白
その怒号は長さを測る
至上の充足の。

軽蔑が堤防すべてを破棄するほどまで、
自らを砕く手前の心、君に残されているのは
軽蔑そのものを軽蔑することだけだ。

XXXIII

君の名は一コンスタンス—どこに行くの—来たところ
ろ
君自身からやって来てそこへと戻るの—その
経帷子を顔から取ってみて、少なくとも君が僕の
夢のどれかに出てきた娘に似ているか知るために。

¹⁹ 女性名詞にかかる « rompre » の COD と考えてみた。

²⁰ おそらく固有名詞としての Constance と「恒常生、不屈」等を意味する constance (n.f.)がかかっているのだと思われる。

– Il n'est pas temps encore. – Ainsi je ne puis rien
sur toi ? – Silence ! Apprends que je suis ta captive
et qu'à chacun des coups soufferts par ton destin
se forme un trait de plus à ma beauté furtive.

Lorsque sera parfait ce visage fidèle,
ton cœur y pourra lire, aux lueurs de ton ciel,
et tes choix accomplis et tes maux acceptés.

Brèves sont tes amours. Comptées et déjà mortes.
Mais ce sont tes amours. Et ta mort, tu l'emportes
toute avec toi. Persiste, et tu seras sauvé.

—まだその時じゃない。—じゃあ君に何もできない
の一静かに！ 私は君に囚われの身なの わかるね
君の運命が放つ苦しい一撃のひとつひとつで
私のつかの間の美にまたひとつ特徴ができるの。

この忠誠心に満ちた表情が完全になるとき、
君の心がそこで読めるだろう、君の天空の淡い光で、
君の選択は成し遂げられ 痛みが受け入れられる。

はかない 君の愛する者たちは。数え上げられもう
死んでいるのだ。

だがそれが君の愛する者たちなのだ。そして君の死
も、

君はそのすべてを君と一緒に持っていく。絶えず生
きよ、さすれば君は救済されるだろう。